

大学と地域を結ぶ教育活動

～日本事情「吉野川プロジェクト」・「徳島を『食べる』プロジェクト」～

Gehertz 三隅友子

(徳島大学国際センター)

1. はじめに

大学において留学生対象に「日本事情」が開講されている(昭和37年当時の文部省省令による)。その教育内容を「一般日本事情、日本の歴史、文化、政治、経済、日本の自然、日本の科学技術といったもの」として「各授業科目の内容については、日本人学生に対する一般教養科目の趣旨と同様の教育的意図を実現できるように留意するとともに、学生が在学または進学する学部専攻分野に応じた基礎知識を持ち合わせて学習しえるよう配慮することが望ましい」とし、「大学教育の水準に応じた内容を有することを要し、初歩的内容のものは従来通り基準外」という大枠の設定はあるが、各大学の授業担当者に細かい内容・方法・目標は委ねられている。

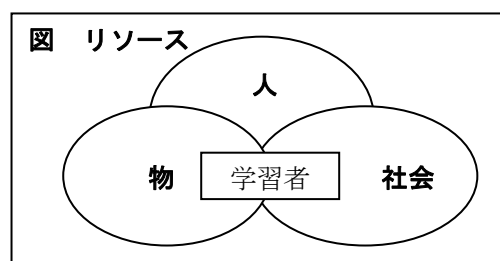
徳島大学では、2001年から現在に至る9年間の「日本事情」において「吉野川プロジェクト」を、さらに2009年前期には「徳島を『食べる』プロジェクト」を加えて実施した。これらのプロジェクトワークでは年代及び担当者によって多少の変化はあるものの、基本的には地域の専門家を招いて話を聞く、あるいは学外の機関を訪問し体験を通して学び、最終的に学生各自がテーマをみつけて調査報告するという形式をとっている。本授業を通して特に地域と大学を結ぶ可能性について考察する(注)。

2. プロジェクトワークとは

徳島大学共通教育科目「日本事情」は留学生対象に前期「日本事情Ⅰ・Ⅲ」後期「日本事情Ⅱ・Ⅳ」の名称で開講している。後期「日本事情Ⅳ」を「吉野川プロジェクト」と、2009年前期は「日本事情Ⅲ」を「徳島を『食べる』プロジェクト」とした。

学習活動としての「プロジェクトワーク」とは、

「学習者がグループでプロジェクトを計画し、その計画を遂行していく過程で目標言語をできるだけ多く使用することで、目標言語の習得と定着を図る学習活動である(参考文献3P.131)」。すなわち教師が知っている内容、知識が教師から学習者へと注入される活動ではなく、現実の様々な活動に即したタスク(課題達成の)活動が行われる。さらにプロジェクトワークには成果発表型、調査型、共同作業型、日本人参加型といった型も存在するが、共通しているのは、①教室と現実の生活をつなぐ②学習者がより主体的になる③体験的な異文化接触を起こす活動であることが挙げられる。この特徴に加えて、人的、物的、社会的リソースが組み合わさって教材となる。



教師はリソースを提示し及び学習カウンセリングによって活動を促進する。また評価に関しては、活動前後の学習者の状態を比べ、その変化から成績(評価)を出すことに加えて、関わった全ての者が互いに評価しあうことによって、次回のプロジェクトの改善へとつながる循環型評価も考えられる。また日本語教育においては、日本語の「正確さ」よりも、コミュニケーションにつながる「流暢さ」を習得することを重視している。

3. 吉野川プロジェクト

専門家の講義を中心に、事前の準備と講義後の日本語確認と文化背景等の補足を教師が行うことを手順としている。以下の流れを期間中に3-4名の講師を招いて繰り返した。

<講義の流れ>

- ①準備 資料読解・質問作成
- ②講義 感想意見等のコメント作成
- ③振り返り 日本語及び内容の再確認

2009 年後期 講義及び体験活動	
1	新町川クルーズ（新町川を守る会）
2	薬用植物園（薬学部）
3	吉野川の概要（国土交通省）講義
4	吉野川清掃（アドプトプログラム）
5	吉野川の農業（野田靖之氏）講義
6	吉野川と第十堰（姫野雅義氏）講義

後半あたりから受講者 6 名が各自のテーマを設定し、調査研究の結果をまとめ、最後に一般の日本人（地域や日本人学生）に向けて 2 月に発表会を催した（発表会を収録し DVD を作成）。

4. 徳島を「食べる」プロジェクト

これは吉野川プロジェクトを実施する中で、吉野川が徳島独自の農業に重要な役割を果たしていることにヒントを得て、また留学生の日本の食についてさらに学びたいという要望から、実施に至った。前半は「玄米先生の弁当箱（魚戸おさむ画、北原雅紀原作）」のマンガを使い、食文化に関するトピック（食育・メタボリック・箸文化等）について理解を深めた。そして県内の様々な機関や施設に出向き、特に「食べる」ことを意識して、さらに五感を使う体験学習を進めた。前期は受講者 4 名が分担し、訪問機関ごとの感想による報告書を作成し、関係機関に送付した。

2009 年前期 講義及び訪問体験活動	
1	県立書道文学館（瀬戸内寂聴展）
2	薬用植物園（薬学部）
3	給食体験（吉野川市鴨島中学校）
4	上勝町研修（「山の学校」宿泊）
5	百姓一・日進酒類（JA とくしま）
6	家庭料理（渭北公民館）

5. 考察

学習者の評価は、体験によって「徳島」を学べ

たことに対しておおむね満足が得られている。特に 2009 年度は、受講生のほとんどが協定大学からの 1 年間（10 月～翌年 8 月）の交換留学生であったため、短期間で多様な体験ができたことを特に評価している。また地域の担当者（講義及び受け入れの）からは、外国人に専門分野を説明することから、用語や話し方に関する自己モニターが働いたこと、講義前の質問や後のコメント等から、外国人ならではの視点や考え方の差を知った等の感想を得た。そしてプロジェクトワークが目的とする、「現実の生活に深く入り、自らが体験し学び、かつ相互交渉を通して異文化理解へとつなげる」が実現できたと考える。

6. むすびにかえて（今後の課題と可能性）

吉野川をリソースとした上述の教育活動は枠組みこそあれ、今後も非常に柔軟な学びを提供するものである。留学生を中心に日本人学生及び地域を含めたまさに共創型学習活動となる可能性を持っている。地域の機関や専門家が「教え手」と同時に「学び手」の役割を持つこともいえよう。

留学生が深く吉野川そして、徳島を知ることにつながり、また帰国後の活躍の中で徳島を世界に知らせる役割も期待できる。この意味でも本活動が徳島の国際化に寄与することも加えたい。

（注） 徳島大学国際センター（2008 年 12 月改組により留学生センターより名称変更）の日本語教員が 2 年ごとに担当している、今回の発表は三隅担当の 2001 年～2004 年と 2009 年のデータをもとに発表する。

参考文献

- 1 Gehrtz 三隅友子（1997）「日本語教育における活動の枠組みにおける一考察～日本人参加型プロジェクトワーク～」JALT 日本語教育論集 2 号 P. 22-33
- 2 Gehrtz 三隅友子・吉廣綾子（2005）「日本事情『吉野川プロジェクト』徳島大学留学生センター紀要 第 1 号 P. 60-77
- 3 田中望他（1993）「日本語教育とその理論」日本放送出版協会（放送大学教材）